

佐伯市文化財調査報告書 第2集

S a i k i j y o u k a m a c h i i s e k i

佐伯城下町遺跡

Sendoumachi Fudabahoujimasen

船頭町札場向島線

平成19年度街なみ環境整備事業(市道札場向島線高質空間形成施設整備工事)に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

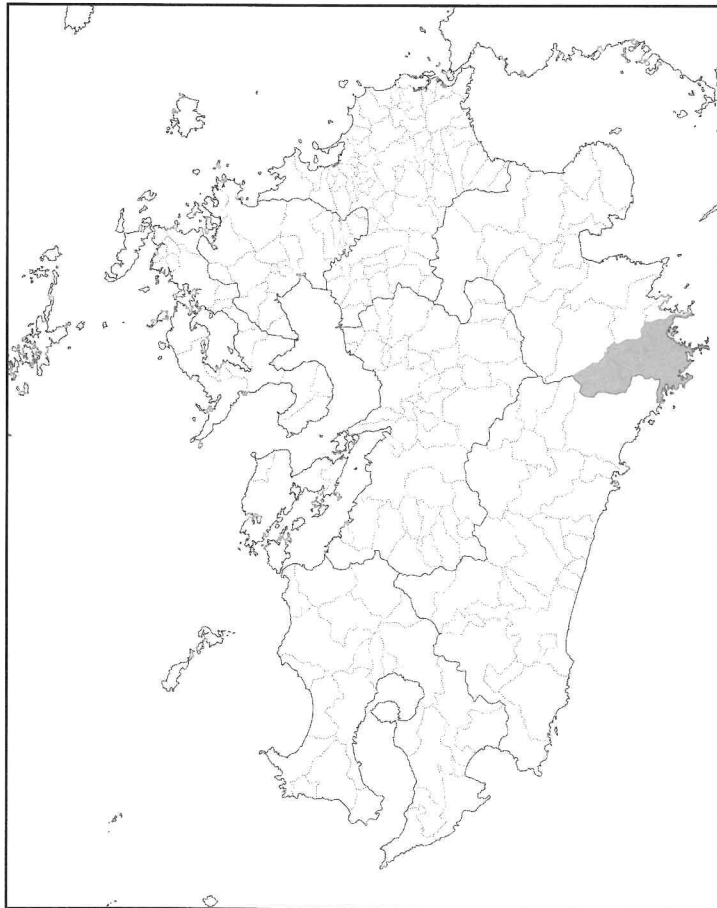
大 分 県
佐伯市教育委員会

序 文

本書は、市道札幌向島線高質空間形成施設整備工事に伴い佐伯市教育委員会が実施した、佐伯城下町遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査を行った船頭町は、近世初期から城下町の一部として発展してきた地区であり、現在まで佐伯市中心市街地の一面を担っています。今回の発掘調査では、近世末期から明治初期頃の遺構や遺物を確認することができました。この時代は船頭町が水運の町としての活気に溢れていた頃であり、本書が当時の景観を復元する一助となれば幸いです。

佐伯市教育委員会
教育長 分 藤 高 嗣

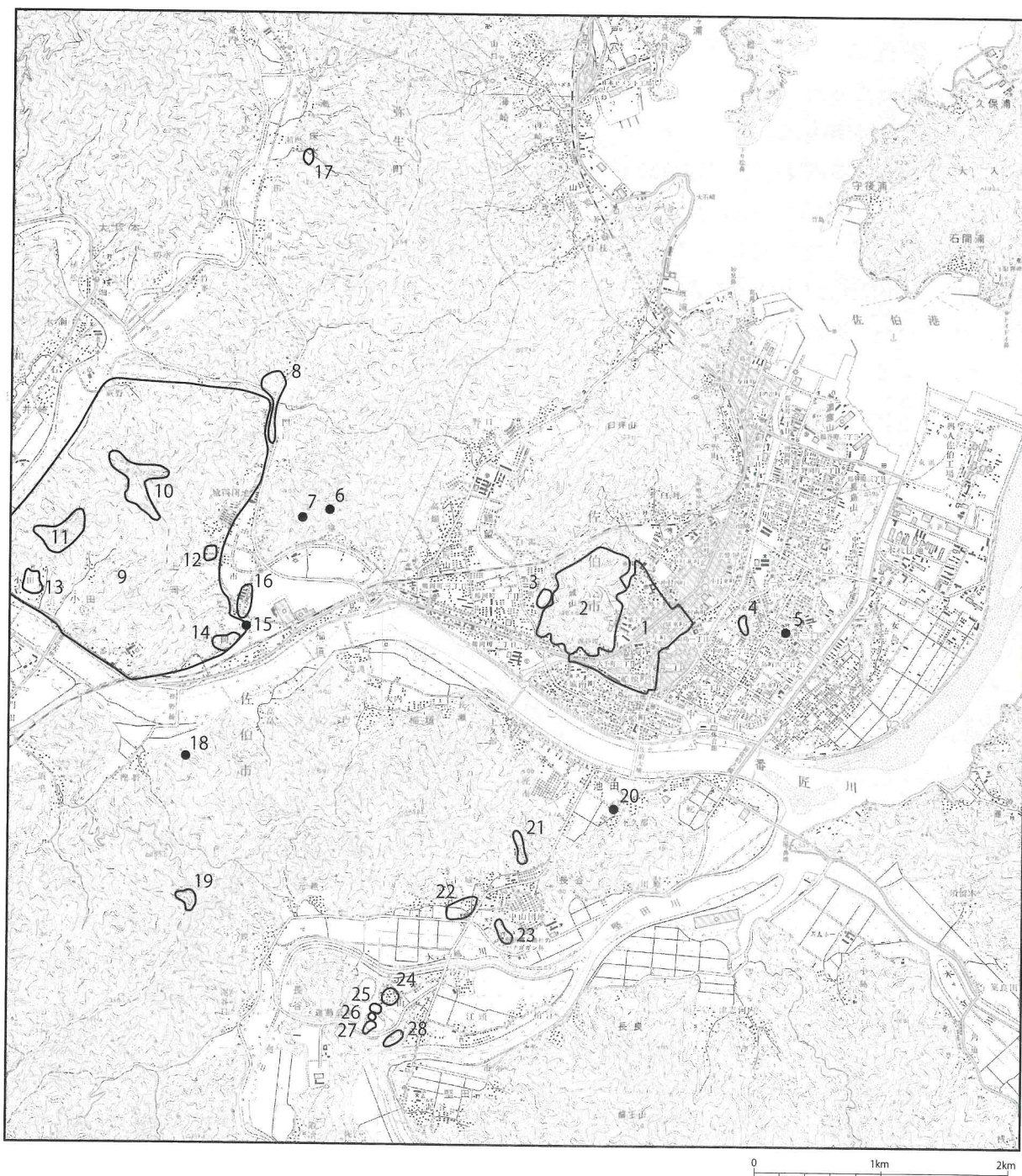


例 言

1. 本書は、平成19年度・平成20年度に発掘調査を実施した、平成19年度街なみ環境整備事業（市道札幌向島線高質空間形成施設整備工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査区は佐伯市船頭町に所在する。
3. 発掘調査は佐伯市教育委員会が主体となり、平成19年2月29日から平成20年6月30日まで実施した。
4. 調査は佐伯市教育委員会文化振興課の吉武牧子、畔津宏幸、福田聡が担当した。
5. 遺構の写真撮影は調査担当者が行い、実測は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託して行った。
6. 出土遺物の整理作業は福田・五十川が行い、実測・写真撮影は五十川が行った。
7. 本書の編集・執筆は福田が行った。
8. 本遺跡の出土遺物、その他諸記録類は佐伯市教育委員会が保管している。

目 次

第I章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	4
第2節 調査地点の歴史的背景	4
第II章 調査の成果	
第1節 調査の概要	7
第2節 調査の成果	
1 基本層序	7
2 遺 構	7
3 遺 物	12
第III章 まとめ	15



1. 佐伯城下町遺跡	2. 鶴屋城跡	3. 白瀉遺跡	4. 荻山遺跡群	5. 宝剣山古墳
6. 三上寺跡	7. 二上寺跡	8. 佐伯門前遺跡	9. 柵牟礼遺跡	10. 柵牟礼城跡
11. 小田山城跡	12. 曳地館跡	13. 小田山館跡	14. 木戸城跡	15. 十三重塔
16. 古市遺跡	17. 瀬戸遺跡	18. 櫻野古墳	19. 高城跡	20. 岡ノ谷古墳
21. 中山砦跡	22. 下城遺跡	23. 八幡山城跡	24. 長良貝塚	25. 上ノ台館跡
26. 上ノ台遺跡	27. 汐月遺跡	28. 宇山城跡		

第1図 周辺遺跡地図 (1/50,000)

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査にいたる経緯

佐伯市街地は近世城下町の町割りを良く残しており、船頭町も同様である。平成19年に船頭町を東西に抜ける道路について路面の美装化工事が計画され、10月26日に当該範囲の埋蔵文化財の有無について佐伯市教育委員会に照会があった。工事箇所は佐伯城下町遺跡内であり、立会調査を行ったところ陶磁器や瓦等と建物礎石と考えられる石列を確認した。路面美装化工事のうち、特に深く掘削する側溝設置工事に際して遺跡が破壊される可能性が考えられた。このため工事担当課と協議の結果、側溝設置範囲のうち遺構が確認された部分について本調査を実施し、記録保存を行うこととした。また、側溝を除去した後は早急に新たな側溝を設置しなければならないため、調査は工事と並行して行った。調査対象面積は184㎡、本調査期間は平成20年3月3日から平成20年6月30日までである。

第 2 節 調査地点の歴史的背景

佐伯市は大分県の南端に位置し、北は臼杵市・津久見市、西は豊後大野市・竹田市・南は宮崎県延岡市・高千穂町と接する。平成17年に旧佐伯市と旧南海部郡5町3村が合併し、九州最大の面積を有する市となった。東海岸は豊後水道に臨む典型的なリアス式海岸であり、西側内陸部は祖母傾山系の急峻な山々が連なる。全体に山がちな地勢で、清流として知られる番匠川下流の沖積平野に佐伯市の中心市街地が展開する。

現在の佐伯市中心部は、近世初期に鶴屋城（佐伯城）の麓に建設された佐伯城下町が発展した市街である。佐伯藩初代藩主毛利高政は、慶長六（1601）年に二万石で佐伯に入部した。藩領はおおよそ現在の津久見市南部と旧宇目町を除く佐伯市（旧佐伯市・弥生町・上浦町・鶴見

町・本匠村・直川村・蒲江町）にあたる。

高政は藩政を行うに際し、それまで佐伯の中心であった榑牟礼城を廃し、新たな居城の建設を計画する。慶長七（1602）年には築城場所に城山（八幡山）を選定し、山頂に佐伯城の建設を開始、これとあわせて城下町の建設も行っている。

城下町建設地には城山の東に広がる、番匠川河口が選ばれた。このあたりの堆積地は塩屋村や塩屋千軒と呼ばれており、製塩業を営む大きな集落があったと考えられる。この地を埋め立て、拡張して城下町を建設している。まず佐伯城が築かれた城山の東麓には武家屋敷が建ち並び、その東には町人地が形成され、ここに榑牟礼城の城下町が移された。さらに周辺を埋め立てつつ幾つかの町場が形成され、十七世紀後半には佐伯城の東に武家屋敷、さらに東に内町、南には船頭町という配置が整う。

城下町の建設にあたっては、街路は地形に沿った上で整然と作られているが、要所には広場を設け、クランクやL字路、丁字路によって外敵の侵入を阻む構造である。さらに自然地形を構成要素に取り込み、番匠川を外堀に見立て、支流や入江、湿地帯も内堀の一部として機能するように設計されている。これにより軍事的防備を固めるとともに火災に対する備えとしたと考えられている。

船頭町はその名が示すように、毛利氏配下の船頭や水主の居住地として築かれた町人地である。当時の船頭町周辺では大小多くの河川が分流・合流しており、水量も豊富であった。河口にも近く、船を利用した物資の集積と運搬には極めて便利な土地であったためである。水路から城下町への玄関口でもあり、元文三（1738）年までには4箇所の船着場に加えて札場、番所も設置され、川岸には石垣が築かれている様子が当時の絵図から確認できる。

この様な性格を持って建設された船頭町には木材や漁獲物をはじめとした藩内の物資が集中し、商家も活発に進出してきた。しかしその結果、船頭や水主らの家屋と商家が混在することとなり、火災が頻繁に発生した。そのため藩は明和元（1764）年と明和六（1769）年の大火を契機として船頭町の再編を行い、安永二（1773）年に新たな町割が完成する。その後町人地の充実は続き、船頭町は発展を続けた。

明治以降も船頭町は佐伯市街地の中心であり、近隣各所からの定期船が到着して商店街を賑わせていた。しかし河川上流の山林伐採の影響や市街地の都市化によって川底に土砂や汚泥が堆積するようになり、船舶の移動に困難を生じることとなってしまった。一方で、盛んであった沿岸漁業は近海・遠洋漁業へと移行し船舶が大型化すると、漁獲物の水揚げは葛港で行われるようになっていた。大正5年には日豊線佐伯駅が開通、大正10年ごろ葛港周辺に魚市場が開かれた。さらに昭和9年に佐伯海軍航空隊が開設されるなど市街地北側が急激に発展すると、船頭町は水運の要、また商活動の中心としての役割を葛港や佐伯港に譲ることとなった。昭和40年代には自動車が普及し、多くの河川が埋め立てられて道路や住宅地、商店となった。船頭町の周囲の河川も道路となって交通の便も良くなり、現在も人々の生活の場となっている。

調査地点は近世城下町の頃からの道路である。船着場での商活動が盛んになるにつれて重要性が増し、船頭町の基軸として成長した。文化三（1806）年に住吉神社が若宮八幡から移築されると、番所・札場と住吉神社を結ぶ通りとなり、船頭町で最も主要な道筋となったと考えられる。

現在は両脇に住宅や商店が並び、西側の番所と札場があった位置には消防機庫が建てられていた。消防機庫は平成20年8月に解体され、公園として整備されている。

《参考文献》

1. 佐伯市史編さん委員会 1974 『佐伯市史』
2. 大分県 1983 『大分県史 近世編Ⅰ』
3. 佐伯市 1982 『佐伯 歴史文化環境整備計画のための調査報告書』



第2図 遺跡周辺地形図 (1/5,000)

第II章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査では側溝部分のみを対象としたため、調査範囲は非常に細長いトレンチのような形状となった。調査は工事業者の協力を得て、側溝設置工事と並行して行った。20m程度を一単位として重機により既設の側溝を除去、地表下80cmほどまで掘削し、遺構を検出した場合は写真撮影と図化を行った後に、新たな側溝を設置する工程を繰り返した。

土層観察は各所で行ったが、このうち4箇所を図化した。店舗や住居となっている側は建築物に伴う掘削による攪乱が著しく、土層の観察は不可能な場所が多かった。一方で現在の道路側は攪乱の影響が少なく、数枚の整地層を確認できた。ただし調査範囲内は既設の側溝により地表下80cmまで掘削されているため、平面的な遺構検出を行えたのは最下部のみである。

調査の結果、近世から近代にかけての陶磁器、瓦、金属製品、銭貨等の遺物を確認し、建物の基礎と考えられる石列や側溝などを検出した。

第2節 調査の成果

1 基本層序

各地点によって差異はあるが、大別すればI層：アスファルトと基礎（現道路面）、II層：黄褐色土層、III層：焼土混暗褐色土層、IV層：暗褐色粘質土層、V層：暗灰色砂層がほぼ共通して認められる。

I層は道路面のアスファルトと基礎の砂利・暗褐色砂層である。II層はしまりの強い砂質土層で、以前の道路面であった可能性が考えられる。III層は焼土のブロックを多量に含んでおり、火災後の整地層である。IV層は比較的厚く堆積する整地層である。漆喰や礫を多く含む層が間層として挟まれることがある。V層は河口や海岸で見られるようなしまりのない砂層であり、

貝殻が含まれている。掘削が地表下1m付近まで達すると出水があり、近世初期に埋め立てられた干潟や砂浜の痕跡であろう。

III層以下は細かな差異によって細分可能であるが、局所的な特徴が多く、調査区全体を通じた詳細な対比を行うことは困難であった。

2 遺構

検出した遺構は石列、側溝、杭であり、検出面は主に地表下約80cmのIV層下部からV層上面にかけてである。IV層の出土遺物から、これらの遺構が造成によって埋没した時期は明治期であると考えられる。

なお、一部では既設側溝直下の地表下50cm前後で検出した石列もあるが、これらは現代の攪乱を受けた層中であり、側溝設置工事の際に掘り起こした礫を基礎として転用したものである。

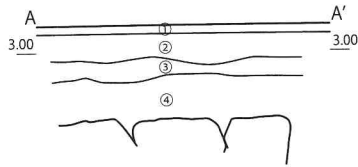
(1) 石列

石列は50cm前後の礫で構成され、平坦な面を上に乗えられている。固定用の小振りの礫が組み合わされているものもある。ほとんどが自然石または粗割した程度の加工で、丁寧に形を整えているものは一部の凝灰岩のみである。

1・2・3・4・5・6・8・11・12・16・17・18・21・22号石列は礫を密に並べている。建物基礎のほか、石組側溝であった可能性も考えられる。

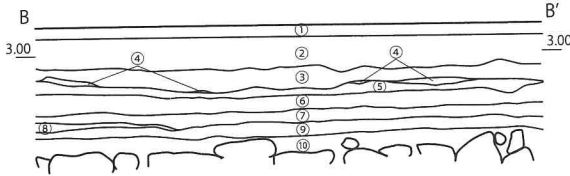
9・10・13・19・20号石列は一定の間隔を置きながら礫が配されている。間隔は90cmまたは1.8m程度であり、建物の礎石であろう。

15号石列は10~20cm前後の礫が密集したような状態で、石列とは言い難い点もあるが意図的な礫の集中であると捉え、ここで報告する。石敷と呼べるほど平坦に揃えられたものではない。建物等の沈下対策として施されたと考えられる。



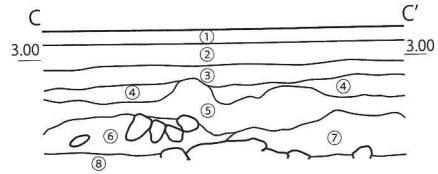
土層注記A-A'

層番号	所見	基本層序
①	アスファルト	I
②	砂利	
③	黄褐色やや黒い	しまっている粘質土。 II
④	暗褐色	砂質土。瓦も含んでいる。 IV



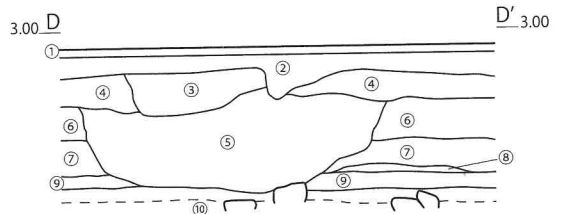
土層注記B-B'

層番号	所見	基本層序
①	アスファルト	I
②	砂利	
③	暗褐色	II
④	白色	
⑤	赤褐色	III
⑥	茶褐色	
⑦	黄褐色	IV
⑧	暗褐色	
⑨	白色	V
⑩	暗褐色	



土層注記C-C'

層番号	所見	基本層序
①	アスファルト	I
②	灰褐色砂利	
③	黄色	II
④	焼土	
⑤	焼土	III
⑥	礫層	
⑦	褐色土	IV
⑧	青灰色	



土層注記D-D'

層番号	所見	基本層序
①	アスファルト	I
②	砂利	
③	赤褐色	II
④	暗黄褐色	
⑤	暗褐色	III
⑥	暗黄褐色	
⑦	暗褐色	IV
⑧	暗褐色	
⑨	暗赤褐色	V
⑩	黒褐色	

第3図 各地点土層断面図 (1/40)

7・14号石列は既設側溝の設置の際に掘り起こされた礫が基礎に転用された結果である。現代の攪乱土中であり、原位置を保っているものではない。

(2) 側溝

側溝は3箇所を確認した。いずれも凝灰岩製で、1号側溝は削り抜き式のもの、2号側溝は3枚の板石を組み合わせたものである。3号側溝はコンクリートで隠れている部分が多いものの、同様に凝灰岩を利用した側溝または敷地の区画であろう。

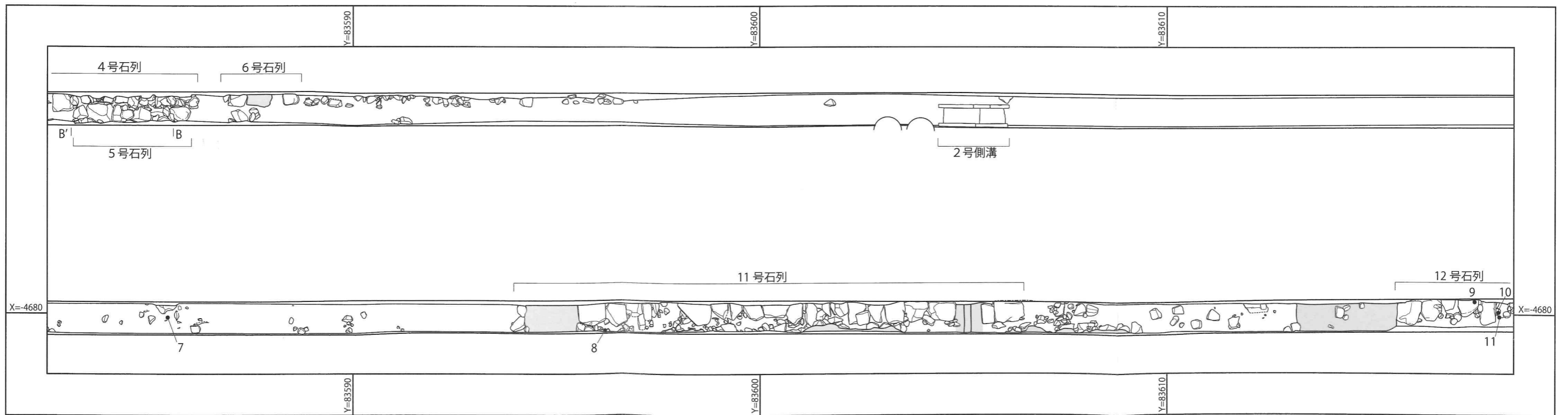
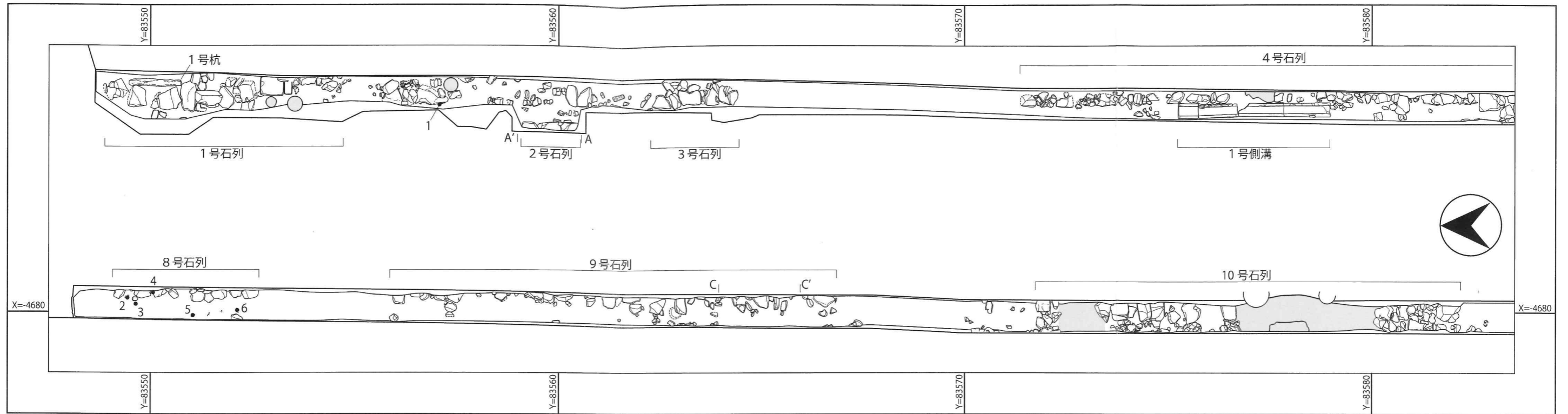
これらの側溝はⅢ層中からⅣ層上面にかけて検出されており、石列よりも新しい時期の遺構である。側溝内には焼土を含む層が堆積しており、火災後の整地に伴って埋められ、遺棄されたと考えられる。

(3) 杭

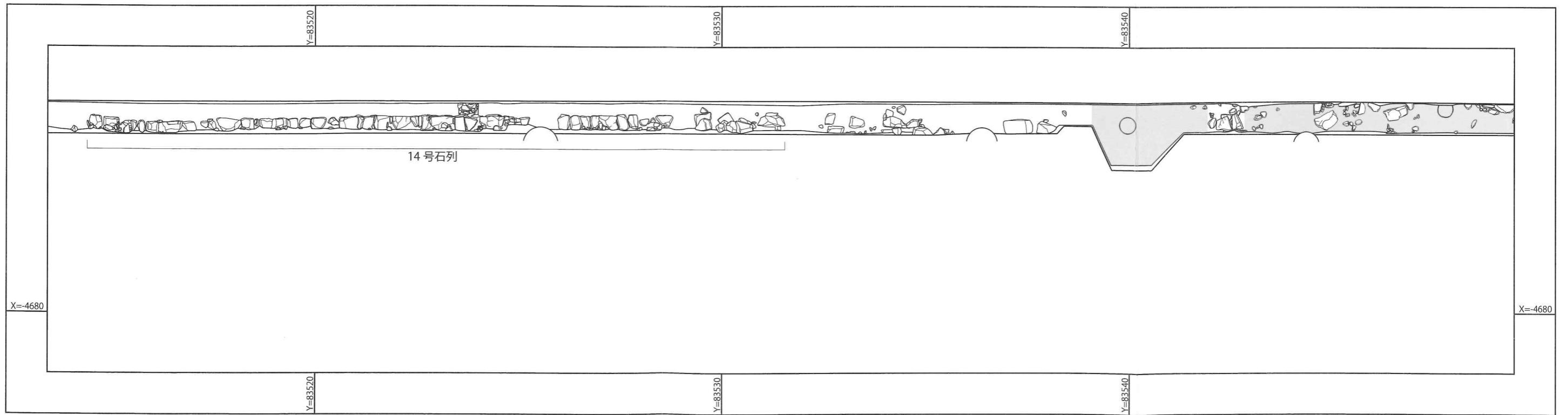
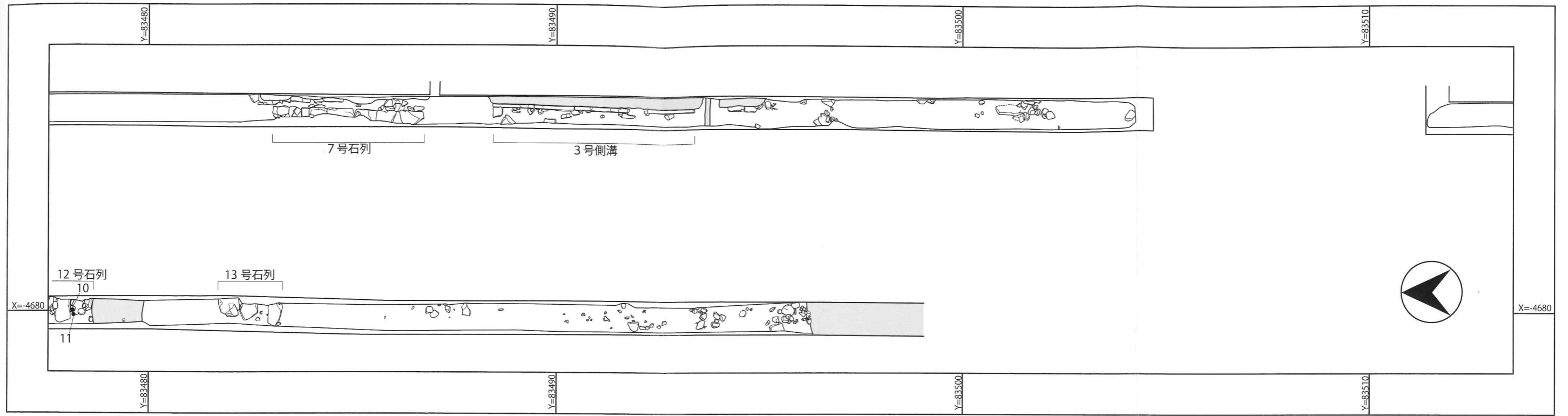
杭は6箇所検出した。このうち1・3号杭はⅤ層上面に寝た状態、2・4・5・6号杭はⅤ層中に打たれている状態であった。直径10cm前後の細いものである。いずれも石列の直近であり、建物に関連したものであろう。

(4) その他

このほか平面的には検出できなかったが、土層観察により数箇所土坑を確認した。いずれも多量の焼土ブロックと被熱の痕跡がある瓦を含み、わずかに木片も含んでいる。火災後の廃棄土坑であると考えられる。

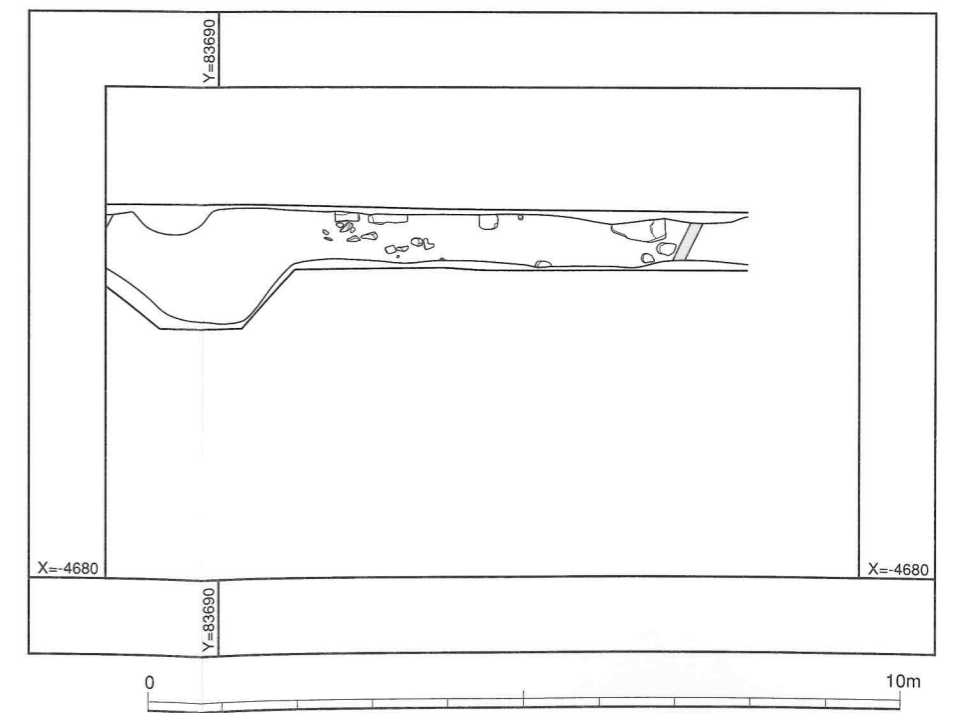
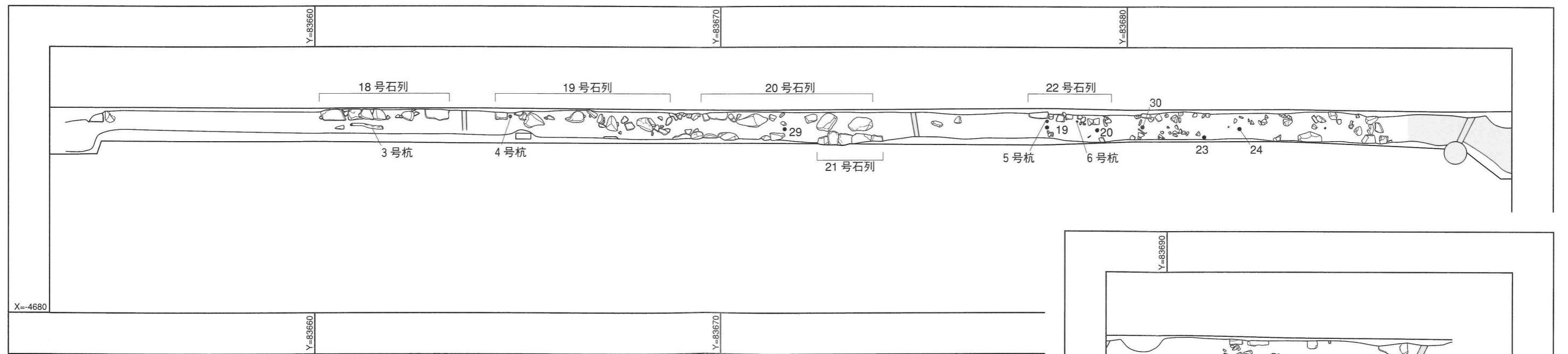
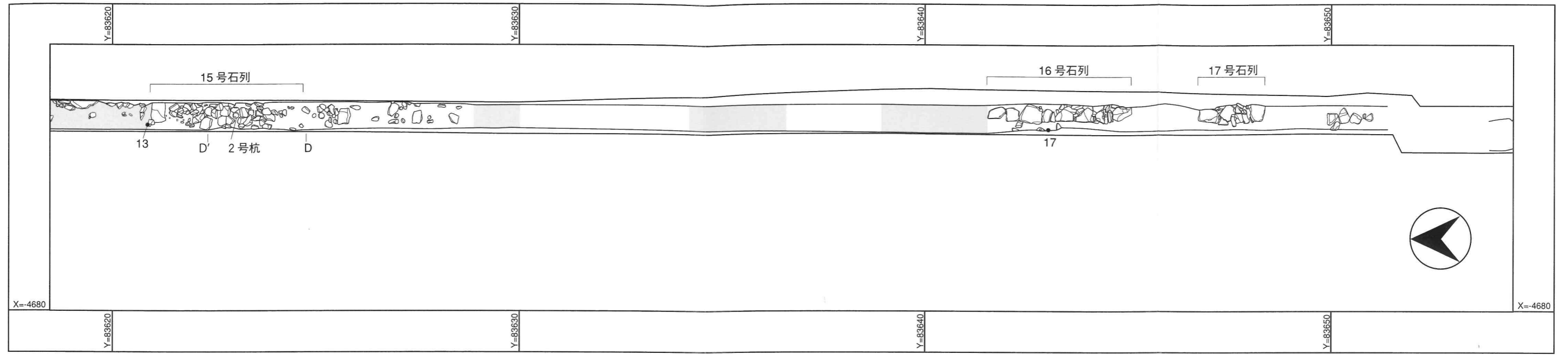


第4図 遺構配置図 (1/100)



第5図 遺構配置図 (1/100)



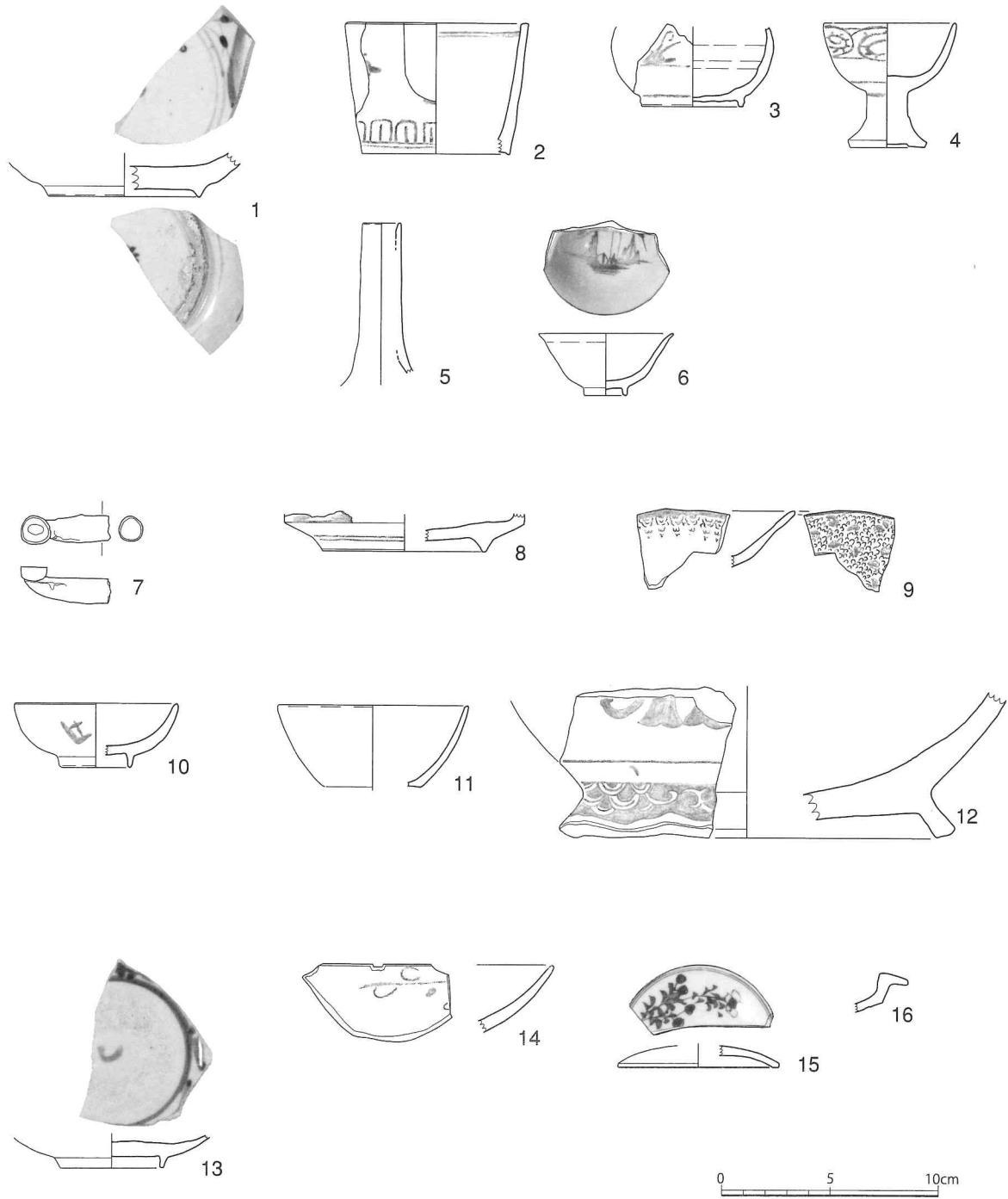


第6図 遺構配置図 (1/100)

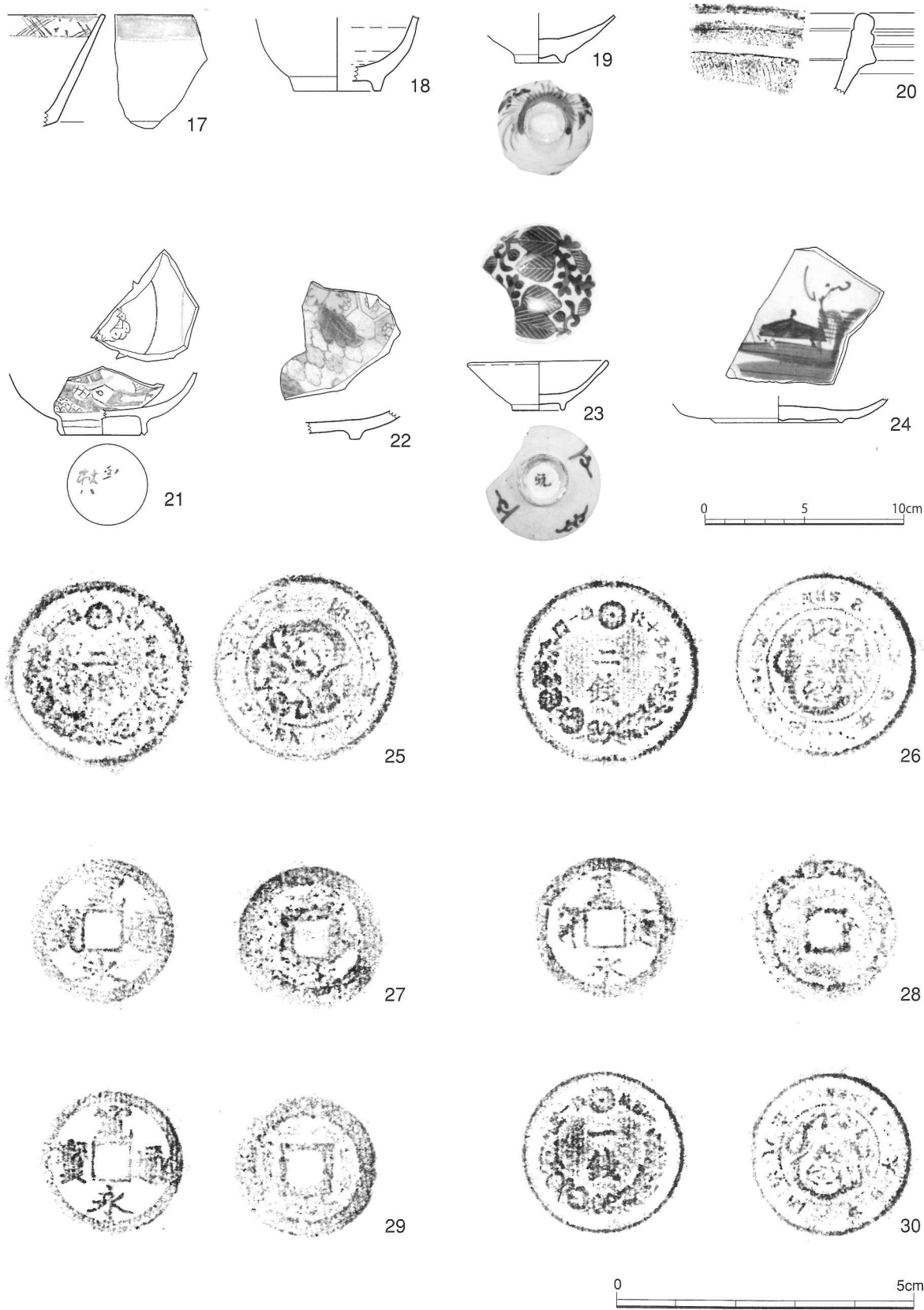
3 遺物

遺物の多くはIV層からの出土である。ここではIV層のうち最下部からの出土遺物を中心に掲

載する。詳細については観察表に記載したので、そちらを参照いただきたい。



第7図 遺物実測図 (1/3)



第8図 遺物実測図 (17~24 : 1/3 25~30 : 1/1)

番号	層位	種類	器種	法量 (cm)			成形	染付・釉薬	製作地	備考
				口径	器高	底径				
1	Ⅳ	磁器	皿	-	-	(6.8)	ロク口	染付透明釉	肥前系	くらわんか・高台内畳付砂付着・五弁花
2	Ⅳ	磁器	猪口	(8.5)	6.1	(6.8)	ロク口	染付透明釉	肥前系	
3	Ⅳ	磁器	瓶	-	-	(4.8)	ロク口	染付透明釉	肥前系	
4	Ⅳ	磁器	仏飯器	6.1	5.7	3.5	ロク口	染付透明釉	肥前系	
5	Ⅳ	磁器	瓶	1.9	-	-	ロク口	青磁釉	肥前系	青磁
6	Ⅳ	磁器	小碗	(6.2)	2.9	2.0	ロク口	染付透明釉		
8	Ⅳ	磁器	碗	-	-	(7.4)	ロク口	色絵透明釉	肥前系	
9	Ⅳ	磁器	碗	-	-	-	ロク口	染付透明釉		型紙刷・被熱を受ける
10	Ⅳ	磁器	小碗	(7.4)	2.9	(3.2)	ロク口	染付透明釉	肥前系	
11	Ⅳ	陶器	碗	(8.8)	-	-	ロク口	透明釉	関西系	小杉碗
12	カクラン	磁器	鉢	-	-	(17.4)	ロク口	染付透明釉	肥前系	
13	Ⅳ	磁器	碗	-	-	(4.8)	ロク口	染付透明釉	肥前系	見込み蛇の目釉剥ぎ
14	Ⅳ	磁器	皿	-	-	-	ロク口	染付透明釉	肥前系	
15	Ⅳ	磁器	蓋	(7.4)	(1.0)		ロク口	染付透明釉		
16	Ⅳ	陶器	蓋	-	-	-	ロク口	灰釉	関西系	土瓶蓋
17	Ⅳ	磁器	碗	-	-	-	ロク口	染付青磁釉	肥前系	外青磁
18	Ⅳ	磁器	瓶	-	-	(4.4)	ロク口			被熱を受ける
19	カクラン	磁器	碗	-	-	2.6	ロク口	染付透明釉	肥前系	
20	カクラン	陶器	搦鉢	-	-	-	ロク口		堺	
21	カクラン	磁器	碗	-	-	(4.2)	ロク口	染付透明釉	肥前系	焼継文字「林□□」
22	カクラン	磁器	皿	-	-	-	ロク口	色絵透明釉		
23	Ⅳ	磁器	小碗	7.2	2.5	2.6	ロク口	染付透明釉	肥前系	
24	Ⅳ	磁器	皿	-	-	(6.4)	ロク口	染付透明釉	肥前系	蛇ノ目凹形高台・山水文

番号	層位	種類	器種	法量			備考
				口径・直径 (cm)	長さ (cm)	重量 (g)	
7	Ⅳ	銅製品	煙管	1.2	4.1	5g	雁首部分
25	Ⅳ	銅製品	銅銭	3.2		14g	二銭銅貨・明治十三年
26	Ⅳ	銅製品	銅銭	3.2		14g	二銭銅貨・明治八年
27	Ⅳ	銅製品	銅銭	2.5		3g	寛永通宝
28	Ⅳ	銅製品	銅銭	2.5		3.5g	寛永通宝
29	Ⅳ	銅製品	銅銭	2.4		3.5g	寛永通宝
30	Ⅳ	銅製品	銅銭	2.8		6.5g	一銭銅貨・明治八年

第1表 遺物観察表

第三章 まとめ

今回の調査では側溝の設置にかかる範囲のみを対象としており、調査範囲は幅約80cm、長さ約230mと極めて細長い形状となった。加えて現代の側溝や上下水道管設置の際の攪乱が各所にあるため、検出した遺構の全体像を把握することはできなかったが、ここで若干の検討を行いたい。

出土した遺物から、検出した遺構は幕末から明治初期の道路や建築物に伴うものであると判断できる。また、IV層検出の石列の中には建物基礎や礎石と考えられるものが確認できた。旧来は道幅が一回り狭かったことを示すものといえる。一方で側溝は石列よりも上層にあり、相対的に新しい遺構である。現在の側溝と平面位置が一致することから、設置時には現在と同じ道幅となっていたことがうかがえる。

なお、船頭町では明治22年に町の9割を焼失する大火が発生しており、III層に含まれる焼土はこの火災に由来する可能性も高いと考えられる。仮にこれを前提とすれば、IV層の下限を明治22年頃と考えることができる。従って、側溝は明治22年以降、石列は明治初期から明治22年頃までの遺構であるということになる。ただし純粋な焼土層はごく一部しか残っておらず、III層の明確な時期を示すものではないことには留意する必要がある。

いずれにせよ今回の調査で検出した遺構・遺物は幕末から明治初期の、船頭町が水運の町として最も活発であった期間の一部を示す資料である。近世城下町の建設以来、河や海と密接な関係を持ちながら発展を遂げてきた佐伯市にとって、また船頭町にとって、重要な歴史の一部といえるだろう。



第9図 明治四年頃佐伯藩時代図（部分）



出土遺物（実測図未掲載）



出土遺物（実測図未掲載）



出土遺物（実測図未掲載）



出土遺物（実測図未掲載）



出土錢貨（寛永通宝）



出土錢貨（銅錢）



土層断面A - A' 北から



土層断面D - D' 北から



4号石列検出状況 西から



1号側溝東端検出状況 南から



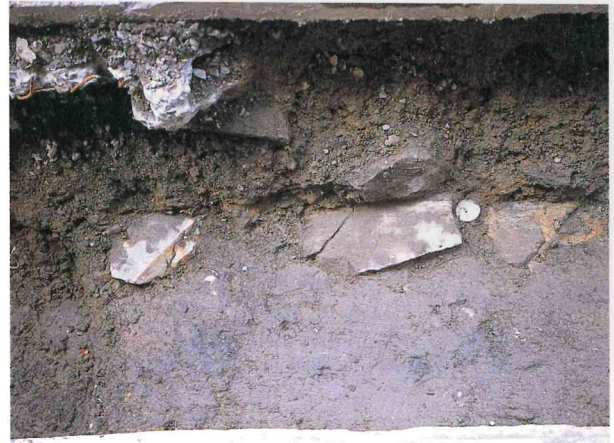
2号側溝検出状況 南から

3号側溝検出状況 東から





8号石列検出状況 東から



8号石列検出状況 南から



10号石列検出状況 南から



11号石列検出状況 西から



11号石列検出状況 南から



11号石列検出状況 南から



15号石列検出状況 北から



2号杭検出状況 北から



第18号石列検出状況 南から



第22号石列検出状況 南から



作業風景



調査区西端・札場跡より調査区を臨む

報告書抄録

ふりがな書名	さいきじょうかまちいせき せんどうまちしどうふだばほうじません 佐伯城下町遺跡 船頭町市道札場向島線
副書名	平成19年度街なみ環境整備事業（市道札場向島線高質空間形成施設整備工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
編著者名	福田 聡
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-0853 佐伯市中村東町6番9号
発行年月日	平成22年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいきじょうかまち 佐伯城下町 いせき 遺跡 せんどうまちしどう 船頭町市道 ふだばほうじません 札場向島線	さいきし 佐伯市 せんどうまち 船頭町	043	012			20.03.03 ～ 20.06.30	184m ²	路面美装 化工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城下町 遺跡 船頭町市道 札場向島線	城下町	近代	石列 側溝	近世～近代 陶磁器・瓦 ・金属製品	

平成19年度街なみ環境整備事業
(市道札幌向島線高質空間形成施設整備工事)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

佐伯城下町遺跡

船頭町市道札幌向島線

2010年3月31日

発行 佐伯市教育委員会
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号
TEL 0972-22-4234

印刷 佐伯印刷株式会社
〒876-0823 大分県佐伯市女島9032
TEL 0972-23-0170